

El japonés que entabló amistad con Lorca:
Koichi Nakayama

「ロルカと交流した日本人・中山幸一」

清水 憲男
Shimizu Norio

*A mi viejo amigo Ian Gibson,
en recuerdo de aquella estupenda barbacoa en Restábal.*

Con el objetivo de aclarar quién es el japonés que tuvo cierta amistad hacia el año 1922 con Federico García Lorca y Manuel de Falla, José Mora Guarnido menciona brevemente a Koichi Nakayama en su clásico libro *Federico García Lorca y su mundo*, publicado en 1958 en Buenos Aires. Presentamos este trabajo que es el resultado de nuestras pesquisas puestas en marcha hace unos treinta años.

Tras denodados esfuerzos pudimos, por fin, dar con la viuda y uno de sus hijos. Este Nakayama (1899-1948) al que menciona Mora Guarnido fue un diplomático que vivió en España desde septiembre de 1922 hasta octubre de 1925, y falleció bastante joven sin dejar nada escrito sobre sus amistades. Durante su estancia en España, en Granada concretamente, tuvo la suerte de coincidir con los “rinconcillistas”, grupo en el que estaban Federico García Lorca y Manuel de Falla entre otros. De hecho, su nombre aparece en un telegrama enviado desde la casa granadina de Falla, para felicitar a Francisco García Lorca con motivo del día de su santo. El telegrama está fechado el dos de abril de 1923 y entre los remitentes del mismo, además de Nakayama, figuran Falla, la madre y las hermanas de Lorca, y otros rinconcillistas.

Gracias a varios testimonios relacionados con Nakayama se sabe que

fue aficionado a la poesía y a la música. Incluso cuando estudiaba la carrera de español en la Universidad de Lenguas Extranjeras de Tokio, hizo un papel de mujer en una obra teatral en español. No cabe duda de que esta anécdota le habría fascinado a Lorca puesto que él, como es bien sabido, llevó aquel grupo teatral ambulante “La Barraca” por los pueblos de España.

Evidentemente la supuesta amistad de Nakayama con Federico no fue tan intensa y duradera como la de Dalí, Buñuel, Neruda o aquel Miguel Pizarro Zambrano que vino a Japón como profesor de español en Osaka; sin embargo, no deja de ser un episodio llamativo el que un joven japonés, futuro diplomático, interviniera de alguna manera en la vida artística de estos genios de la España moderna.

1. 詩人口ルカと東洋

スペイン文学通史でもっとも重要な詩人の一人ガルシア・ロルカ (Federico García Lorca, 1898-1936) に関しては、すでに膨大な研究がなされており、とりわけ彼の生涯に関してはイアン・ギブソン (Ian Gibson) の一連の著作¹をもって、ほぼ全容が知られている。本稿は、筆者が長時間をかけて遅々として資料収集をした成果をもって、不遜を顧みることなく、そこに小さな一石を投じようというものである。つまりロルカとファリャ (Manuel de Falla) と親交をもった日本人・中山幸一 の存在に少しく光を当てる。

後に詳述する中山幸一との交流以外に、あるいはそれ以上にロルカはもう一人の友人ミゲル・ピサーロ・サンブラーノ (Miguel Pizarro Zambrano) 経由で日本についての情報を得ており、このピサーロはロルカの生涯、詩作品で折に触れて顔を出す。とりわけピサーロの詩集冒頭に冠されたロルカの詩²はよく知られる。

1 ロルカ関係で最新の著作は、ロルカ暗殺の主役として Ramón Ruiz Alonso を特定した *El hombre que detuvo a García Lorca*, Madrid, 2007.

2 ¡Miguel Pizarro! / ¡Flecha sin blanco! / (...) / El Japón es un barco / de marineros antipáticos, /", Pizarro, Miguel, *Versos*, Málaga, 1961, p.9.

しかしながら、こうしたいわば直接的な動機以前の環境を押さえておく必要がある。それはフランスを基軸としたジャポニズムの余波である。もちろんここでジャポニズム運動そのものをあらためて解説する余裕はない。確かなことは 20 世紀初頭に日本の俳句への関心がフランスで高まり、一例だけをあげれば 1905 年にポール・ルイ・シュシュ (Paul Louis Chouchoud) が俳句の書を出している³。ロルカはフランス語運用能力こそなかったものの、少なくとも読むことはできた⁴。つまりロルカの東洋、具体的には日本への関心の一要因として、隣国フランスのジャポニズムをひとまず考えることができる。

スペイン、なかんずくロルカの場合、いわゆる近代主義の流れも考える必要がある。東洋的エキゾチズムに染まった、もしくは染まったと見せかけたルベン・ダリーオ (Rubén Darío) を総帥とする近代主義者たちの作品は、俳諧とは言いながら、形式面でも日本のそれとはかなり隔絶したものだ。それを深めて本格化させたのがメキシコのタブラダ (José Juan Tablada) だったのは周知であり、フランス語にも通曉したタブラダは翻訳を介して俳諧を咀嚼しスペイン語での詩作を試み、スペイン語世界に新しい可能性を展開させるのに成功した⁵。そしてロルカの周囲を見渡すと、まず近代主義的な作品で成功をおさめたバリエ・イン克蘭 (Valle-Inclán) が 1919 年の『正統王妃の笑劇と認可』(*Farsa y licencia de la Reina Castiza*)⁶ で芭蕉の「古池や」を翻案したものを発表している。さらにラファエル・ロサーノ (Rafael Lozano) は 1921 年の『幻惑の雲雀』(*La alondra encandilada*) で句作に挑戦している。

ところがロルカの弟フランシスコ (Francisco) によれば、兄ロルカの

3 次の文献が詳しい。Rodríguez-Izquierdo, Fernando, *El haiku japonés*, Madrid, 1972, p.190 y ss.

4 Mora Guarnido, José, *Federico García Lorca y su mundo*, Buenos Aires, 1958, p.73.

5 このあたりの事情に関しては Rodríguez-Izquierdo の前掲書、Aullón de Haro, Pedro, *El jaiku en España*, Madrid, 1985, p.43 y ss.; Bower, Gary L., “The Japanese haiku in Hispanic Poetry”, *Monumenta Nipponica*, XXIII, 1-2, 1968, pp.187-189.; Rubio Jiménez, Jesús, “La difusión del Haiku: Díez-Canedo y la revista *España*”, *Cuadernos de Investigación Filológica*, 12-13, 1987, pp.83-100 など。

6 *La pluma*, Madrid, 1-3, 1920, p.111. 次の文献も参照 Speratti Piñero, Emma Susana, “Valle-Inclán y un *Hai-ku* de Bashō”, *Nueva Revista de Filología Hispánica*, XII-1, 1951, pp.60-61 (nota 6). 同筆者の次も参照。De “Sonata de otoño” al *esperpento* (*Aspectos del arte de Valle-Inclán*), London, 1968, pp.49-50.

4 清水 憲男

文学指向は1916年あたりに始まったとされ、早くも初期段階の1917,8年あたりから東洋的な雰囲気を自作に込めており⁷、インド哲学関連の書物を読んだり、東洋的なものと通底しうるスペイン神秘主義の作品を読んだのと無縁ではない⁸という。

さらに興味深いことに、ロルカがマドリードの有名な学生館 (Residencia de Estudiantes) に移ったのは1919年だが、書いた年は明記されていないものの翌年(?)に同学生館から、”*Hai-kais de felicitación a mamá*” (「母を祝す俳諧」) を母親に送り、弟に向けた書簡で俳諧を説き、自分がその手法を取り入れた理由を簡潔に説明している⁹。となるとロルカの俳句指向はバリエ・イン克蘭やラファエル・ロサーノとほぼ同期、もしくは先んずる。ましてや後に再検討するピサーロの日本行きに先行するかたちで日本に関心があったことになる。

ロルカが直接接した大詩人アントニオ・マチャード (Antonio Machado) の感化が考えられなくもないが、その可能性はむしろ薄いと見たほうがよからう。なるほどロルカは、自分が多大な影響を受けたグラナダ大学美術史教授ロドリゲス・ベルエタ (Martín Rodríguez Berrueta) の引率のもと、1916年にウベダ (Úbeda) とバエサ (Baeza) に遠足で出かけ、バエサで同窓生とマチャードを表敬訪問し、マチャードは *Alvargonzález* のロマンセを朗読して聞かせている¹⁰。フランス語訳やタブラダ経由で俳句に通じていたマチャードが、山崎宗鑑にまで言及した短詩を1920年に発表したのは事実だが、18歳のロルカと会った1916年の段階で、マチャードがロルカに俳句を説いたとは考えにくく、少なくとも具体的根拠をもって客観的にそれを実証することはできない。

7 初期の詩には全集に未収録のものが少なくなかったが、現在では Christian de Paepé の長年にわたる地道な仕事の成果 *Poesía inédita de juventud*, Madrid, 1994 でほとんどを読むことができ、1917年6月29日以降の詩が収録されている。本書には未収録の1918年の詩で、如来 (Tathagata)、釈迦 (Siddhattha)、釈迦を誘惑した悪魔 (Mara) などに言及した詩 (*El palacio en sombra* で始まる) も知られている。

8 García Lorca, Francisco, *Federico y su mundo*, Madrid, 1980, p.161.

9 *ibid.*, introducción, p.XIII.

10 *ibid.*, pp.90-91.

2. 中山幸一

本稿筆者が Koichi Nakayama の名前を初めて見かけたのは、1958 年にアルゼンチンのブエノス・アイレスで出版された前掲ホセ・モラ・グアルニード (José Mora Guarnido) の著書でであった。ロルカの弟に言わせると細部では不正確な記述が少なくないが、ロルカの青春時代を適切に想起したもの¹¹ だという。

後に言及するロルカを含めた「片隅グループ」に加わるようになった Koichi Nakayama は、本書で次のように紹介されている。①日本政府から派遣されて来た外務省研修生。②マドリードで日本大使館の監視が厳しすぎたのでグラナダに逃げてきた。③新しい環境に順応するのが早かった。④闘牛が好きで、往年の名闘牛士ファン・ベルモンテ (Juan Belmonte) の愛称「感動の闘牛士」(torero de emoción) を自認したばかりか、親しくなった相手に限って渡す名刺には「NAKAYAMA KOICHI、別名ナキータ / 感動の闘牛士」とあった。⑤西洋の教養が深く、東洋の風習などを西洋のものと比較して的確に説明した。⑥日本文学、日本の詩について解説し、みずからの習字をもって自作の俳句を書き、対訳を示した。花や風景の挿絵が巧みで、時には竹笛で日本のメロディーを吹いて聞かせた。⑦作曲家ファリャの家で長時間にわたって歓談し、日本音楽の解説をした。⑧聖週間の宗教行列にまつわる説明を Nakayama にしてやると、スペインの宗教を愚弄した。⑨ Nakayama は性体験がなかったため日本の性風俗に関する情報を提供してくれず、Nakayama が女を知ったのは渡欧してからで、自分は親同士が決めてしまう結婚に猛反対の意思を示していた。⑩満州に日本が侵攻した折り、中山の名前が公電に総領事としてあったのを新聞で見て以来、Nakayama の消息は不明。¹²

ロルカやファリャと知己を得た希有の日本人ともなれば、現役のどなたかがご存じのはずと考え、スペイン語界の長老何人かに本稿筆者は尋ねたが、どなたもご存じない。このあたりに関しては、以前『朝日新聞』に拙稿を寄せたことがある¹³。以来、少しずつ調べを進めた。すると同志社大

11 *ibid.*, p. 92.

12 *op.cit.*, pp.60-62.

13 1992年5月20日夕刊文化面。

学の故大島正教授が前掲書に気づき、カタカナ表記で「ナカヤマ・コイチ」として数行の言及¹⁴にとどめておいでだった。つまり同教授は Koichi Nakayama が何者か突き止められなかった。

当時スペインに渡った日本人といえば、ほんの一握りでしかなく、外務省からの派遣留学生ということで特定は比較的容易との推測から、Koichi Nakayama 探しを始めたが、すぐさま厚い壁にぶつかった。日本外務省関係を調べると、当人はだいぶ前に東京で他界していて、家族の所在も不明とのことだった。姓・名ともに平凡なため、次の段階に進みがたい。とにかく都内の電話帳で、載っているはずもない故人を特定するという原始的な方法で作業を進めた。このことに関しては前掲の朝日新聞で報告したので繰り返さない。そして「中山幸一」の未亡人、ご家族に逢着することができたのは、今から 30 年近く前のことだった。

当人が特定できたことで外務省が保管する資料（以下、「外務省資料」）で中山幸一の履歴に当たることができる。この計 5 枚からなる手書きの外務省資料によれば、中山の主要履歴は以下のようなものだ。

1899 年 11 月 16 日、岡山県津山に生まれる（つまりロルカより一歳年下）。1918 年東京外国語学校西語科貿易部に入学し、21 年卒業。翌年 4 月に外



スペイン滞在中の中山
(撮影場所、日付不明)

務省留学生試験に合格し、6 月 5 日にスペイン留学を命じられる。7 月 21 日に東京を出て、馬德里（マドリード）には同年 9 月 9 日に到着し、6 日後の 9 月 15 日に「外務書記生」を拝命している。スペインでどのような生活をしていたかは外務省資料に記載がなく、1925 年 10 月 16 日にマドリードを出て帰国の途につき、同年 12 月 3 日に東京に戻っている。

スペイン以外の記録で目立ったものを列挙すると、次のようなものだ。1926 年 11 月に婚姻届けを出し、パナマ在勤を命じられ 1927 年に現地赴任（在勤の発令は前年）する。1930 年 8 月 8 日、

14 「ガルシア・ロルカの詩・文における日本の投影」、『人文学』（同志社大学人文学会）、第 63 号、1962、p.7。なお、朝日新聞に掲載された拙稿以降に出たギブソンのロルカ評伝邦訳『ロルカ』（内田吉彦・本田誠二共訳、中央公論社、1997 年）では、「中山公一」と誤った当て字が Nakayama Koichi に用いられている（同書、p.78, 618）。

同国より帰着。1933年6月24日、キューバのハバナに着任し、1939年10月28日に東京帰着。それ以降は外務省から国内各地へ出張を繰り返して、満州、中国へも2、3ヶ月単位の出張を2回ほどしている。

1941年8月に「公使館二等通訳官」を任じられ、同月21日付けで再び「パナマ国在勤ヲ命ス」とあるが実現した様子はなく、翌年は「ディリー」（外務省）、1943年にはマレー半島の「シンゴラ」（大東亜局）などで在勤している。その後、1946年3月26日付けで「依願免本官」とあり、同日付で「終戦連絡中央事務局事務ヲ囑託ス（無給）設営部庶務課勤務を命ス」、さらに同年8月31日付けで「依願囑託ヲ解ク」となっている。外務省資料は最終的に「昭二十三年十月死亡」と書き加えられて終わっている。

以上のデータを、別の資料から補強できる。第一は言うまでもなく中山幸一の遺族の証言である。先にも言及したように、筆者は電話帳経由で遺族を突き止め、1980年に2回面会させていただいている。相手は未亡人の政子氏（現在は故人）と次男の浩二氏だった。それによると、スペインから帰国した中山は、同じ岡山県で1905年11月3日に生まれた政子氏と、東京で見合いをして結婚した。（ただし前掲のように外務省資料では前年11月に婚姻届を提出している。）結婚当時の幸一の身分は外務省通訳生だった。幸一と政子氏は3人の子供をもうけた。中山幸一は兄、姉、妹がいる4人兄弟の次男。スペインから帰国して以来、中山がスペインを再訪したことはなかった。

それ以外に興味深いデータとして、次のようなことが挙げられる。政子氏が幸一からロルカのことを聞かされた記憶はない。また幸一とロルカのこと、政子氏を訪ねてきたのは本稿筆者が最初のことだった。スペイン語からの翻訳を数冊の分厚い大学ノートにびっしりと書いていたが、そのノートは中山の死後に紛失した。かなりの蔵書を所有しており、その半分以上はスペイン語のものだったが、70年代に某人に引き取ってもらった。ただし、その人の名前は思い出せない。とりわけ幸一がとても大事にしていた皮表紙の3~4巻があったが、それも70年代後半に手放して行方不明（これがロルカの作品集である可能性を筆者としては考えたいが確認は不可能）。幸一には日記をつける習慣はなく、スペイン滞在記のようなものを書いた気配もない。スペインから帰国後、スペインの友人たちと文通をしていた様子もない。幸一が50歳で死んだのは東京の中野区弥生



学生西語劇。前列中央の女性役が中山。

町5丁目、1948年10月22日で、死因は急性腹膜炎だった。中山幸一は高尾の南多摩霊園に埋葬されている。亡くなった時は大東亜省の管轄下にあった立川の進駐軍系統の仕事に従事していた。

これは後述することと関係するので特記しておく、幸一が書道をやっていたことはないが、活字のような字体を模するのは得意で器用だった。尺八の心得はなかった。また特別、文学青年という印象もなかった。

1980年12月上旬に政子氏に二度目にお目にかかった際、生前の幸一が一番親しくして存命中の方をお尋ねすると、ボリビア特命全権大使をつとめられた川崎栄治氏の名前をあげられた。そこで今度は川崎栄治氏を1980年12月18日の午後、日本チリー協会（当時・東京海上ビル）にお訪ねした。中山幸一同様、東京外語でスペイン語を学び、外交官の道を進まれた方である。川崎氏が語られた主な点は次のようなものだった。中山幸一はおとなしく勉強熱心だった。中山は最上級生の時、『王なればこそ』というスペイン語劇で女性のCarmen役を演じて絶賛を博した。川崎氏は日本公使館員としてスペインに赴任し、中山幸一のスペイン滞在3年目の終わり半年ほど滞在が重複しており、マドリッドで中山に会ったことがある。当時、公使館には月に3~5人ぐらいの来客しかなかった。中山がスペインの大学に在籍していたかどうかは不明で、よく旅行をしていたらしい。中山が経済的に逼迫した様子はなかった。

先に言及した中山の蔵書や翻訳ノートに関して川崎氏はご存じなく、そ

もそも中山は自分を誇示することが一切なかったので、ロルカやファリヤに関する言及も川崎氏は耳にしたことがなく、要するに中山は典型的な外交官タイプではなかったのだという。川崎氏にお目にかかった4日後の12月22日に同氏から電話をいただき、筆者が説明したモラ・グアルニード解説の⑩、すなわち中山が打った公電に関しては、中山が天津の日本総領事館にいたことがあり、その間に奉天にも出かけているので、公電はそこから打ったものと推測されるとの示唆をいただいた。

中山幸一像を浮上させるのに役立つ資料がもう一つある。これは本件を調査中である旨を、筆者が私淑する故・長南実東京外国語大学教授にご説明し、同教授からコピーをいただいた資料だ。同教授はコピーをくださる際に出典を明示されなかったが、川村功氏を中心とした卒業生の尽力で1979年に刊行された『東京外語スペイン語部80年史－人物と業績－』であることは間違いない。それは昭和6年に卒業された川村功氏の文書中の言及からしても裏付けられる。その同氏が執筆された記事「(一) ラテン・アメリカ外交に活躍した同窓群像」(pp.501-522)に中山幸一への言及が見られる。

川村氏の記述によると、1921年にはスペイン語の同期生29名のうち10名が外務省に入っていて、その中に中山幸一や前掲の川崎栄治がいた。ただしこれは外務省資料の1922年と一年食い違っている。小柄な中山幸一は在学中スペイン語部の語劇にカルメンに扮し、それが実によく似合い、大いに賞賛を受けたという¹⁵。

以上が文書資料、故中山幸一を直接ご存じの方々から得ることのできた、同氏に関しての、ほぼ全容である。

3. 中山幸一とロルカ

中山がスペインでどのような生活を送っていたかを知る資料は皆無に近い。マドリードにある公立語学学校日本語科の刊行物『東雲』で、中山がマドリード滞在中の日西間の重要なできごとが列挙されている¹⁶が、後の

15 前掲八十年史、pp.510-511.

16 *Shinonome*, Escuela Oficial de Idiomas de Madrid, Departamento de Japonés, 1981, diciembre. とりわけ中山の滞在該当年を記録した p.13.

昭和天皇となる裕仁皇太子が1923年6月4日にカルロス3世勲章の叙勲を受けられたことへの言及がある程度で、研修生でしかなかったこともあり、中山への言及はない。

となると今一度立ち帰らねばならないのは、ホセ・モラ・グアルニードの著書に見られる中山への言及である。中山がマドリードでの監視を逃れてグラナダに行ったといっても、どの程度の期間行ったのかは不明だ。ただ有名な「片隅」(*Rinconcillo*) グループの仲間入りをして、ロルカその他のメンバーに日本のことを話したり、当時すでに押しも押されぬ大作曲家となっていたファリャと長時間にわたって話しをしたりしたとなれば、行きずり、短期間のグラナダ滞在とは考えにくい。

ここで「片隅」グループを詳述する余裕はないが、要するに気鋭の芸術家などがグラナダのカフェ(Café Alameda)に頻繁に集まって四方山話に花を咲かせた青年グループのことだ。このグループとは別に闘牛士のグループもよく集まっていたらしい¹⁷。このカフェの主人が無類の音楽好きで、毎日ピアノと弦楽器の生演奏が行われていたという。「片隅」という名称の由来は、ロルカをはじめとするグループが日本式に言う一階から二階に通じる階段下の隅の丸テーブル2,3個に陣取るのが常だからで、階段を上がるとピリヤードが遊べるようになっていた¹⁸。



片隅グループが集まった場所。
修復以前の階段下には空間があった。(筆者撮影)

17 Couffon, Claude, *Granada y García Lorca*, Buenos Aires, 1967, pp.28-29, nota 2.

18 Francisco García Lorca, op.cit., p.103.

この知的青年グループの発生は1915年あたりと考えられ、20世紀中頃までのスペイン文化史を考えると、錚々たる人材が集結したことになる。とりわけ初期グループ首領格の Francisco Soriano Lapresaをはじめ、Melchor Fernández Almagro, Miguel Pizarro Zambrano, José Mora Guarnido, José Fernández Montesinos, Ramón Pérez de Roda, Antonio Gallego Burín, Manuel Ángelez Ortiz, Juan Cristóbal, Ángel Barrios としてももちろん García Lorca 兄弟などだ¹⁹。画家の Manuel Ángeles Ortiz は後にパリ、ジャーナリストの Jose Mora Guarnido はアルゼンチン、文芸批評家の José Fernández Montesinos はドイツ、詩人の Miguel Pizarro Zambrano は日本といった具合に三々五々散って解体してゆくことになるが、Francisco Soriano Lapresa は主にフランス文学、Ramón Pérez de Roda は英国文化²⁰、そしてそこにひょっこり加わった中山幸一が遙かなる異国日本に関する情報を提供したことになる。

中山がいつグラナダの「片隅」グループに顔を出すようになったかだが、具体的なデータは残されていない。ただ確かなことは、先に詳解した外務省資料によると、中山がマドリッドに到着したのは1922年9月9日であり、奇しくもこの年、同グループはもっとも活気づいていたことだ²¹。ただし1922年の9月に右も左も分からぬマドリッドに中山が着き、年内早々に日本公使館の監視から逃れるべくグラナダに逃避したというのは、不可能とは言えないまでも考えにくい。中山のマドリッド到着に約2ヶ月先立つ1922年の7月1日、「片隅」グループの仲間たちは、ルイス・マリスカル(Luis Mariscal)がテサロニキでのスペイン副領事、ミゲル・ピサーロ・サンブラーノが日本の大阪外語にスペイン語教師として任命されたことで出発前の祝賀会をグラナダのレストランで開いているが、そこに両名以外にロルカ兄

19 構成メンバーに関しては Gallego Morell, Antonio, *Antonio Gallego Burín*, Madrid, 1973, p.25.; Rodrigo, Antonina, *Memoria de Granada: Manuel Ángeles Ortiz Federico García Lorca*, Barcelona, 1984, p.77, 108, 112. この「片隅」グループに関する研究の必要・重要性に関しては Auclair が次のような確な指摘をする。“Il aura une histoire le jour où un érudit consacra le temps nécessaire à la recherche de ses principaux habitués, leurs activités, leur influence qui s’étendit bien au-delà d’une cité somnolente.” Auclair, Marcelle, *Enfances et mort de García Lorca*, Paris, 1968, p.60.

20 このあたりの事情に関しては Francisco García Lorea, op.cit., pp.141-143.; A. Rodrigo, op.cit., p.114.

21 A. Rodrigo, op.cit., p.129.

弟、F. Soriano Lapresa, A. Gallego Burín, Alfonso García Valdecasas, M. Ángeles Ortiz などの名前はあっても²²、日付からして中山の名前はありえなかった。

では中山の所在がグラナダで確認されるのは具体的にいつか？ 1923年4月2日、グラナダで作曲家ファリャの実家に集まった「片隅」グループのメンバー数人、ファリャ、ロルカの母親、妹（Conchita, Isabel）などが連名で、マドリードの学生館滞在中のフランシスコ・ガルシア・ロルカに、彼の聖人の祝日を祝う長文の電報を打っており、そこに一人中山だけ Nakayama Koichi とフル・ネームで記載している²³。

弟ともどもマドリードにいたフェデリコの名前はここには当然ないが、この時点ですでに中山はロルカを含めた「片隅」グループやファリャと親交があったことになる。つまりスペインに入ってから半年もしないうちに、中山はロルカをはじめとする「片隅」グループや大作曲家ファリャとグラナダで親交を結んでいたのである。そして前に紹介したホセ・モラ・グアルニードの中山に関する記述と照合すると、スペインに入ってから半年以内で日本の文化や音楽について論じたという以上、並外れたスペイン語運用能力があったことになる。

次に日本に渡ったミゲル・ピサーロ・サンブラーノと中山が親交を結んだか否かが問題になる。少なくとも現段階で、その資料的裏付けは取れていない。前掲の中山の名前が見られる電文にミゲル・ピサーロ・サンブラーノの名前はない。本稿筆者はピサーロについて稿をあらためて論じる用意を遅々として進めているので、ここで深入りすることはしないが、ピサーロは1919年にグラナダからマドリードに転居して月給300ペセタで *El Sol* 紙で働いた後、1922年に日本に向けて出発している²⁴。中山は1922年にマドリードに入っているが、両者の資料を照合すると、少なくともしばらくの間は知己を得ていないことが判明する。というのは日本側、正確に言うと大阪外国語大学側の

22 *ibid.*, pp.129-130. 同じく Gibson, Ian, *Federico García Lorca 1. De Fuente Vaqueros a Nueva York*, Barcelona, 1985, pp.156-157. Antonio Gallego Morell は前掲書 pp.40-41 で祝賀会を同年8月としているが、具体的に日付まで記している A. Rodrigo、とりわけ7月4日のルポルタージュに本件が掲載されたと出典明示しているイアン・ギブソンの記述の方が信頼性が高い。また仮に Antonio Gallego Morell の方が正しかったとしても、やはり中山の参加は不可能だったことになる。

23 Francisco García Lorca, *op.cit.* に冠された Mario Hernández の序文 p.XIV に引用。

24 Gibson, *op.cit.*, I, p.141.; A. Rodrigo, *op.cit.*, p.139.

資料によると、ピサーロが同大学に採用されたのは1922年9月1日付け²⁵、日本の外務省資料によれば中山は1922年7月21日に東京を出て9月9日にマドリードに入っているからだ。つまり洋上のどこかですれ違っていることになる。

ただし中山が1925年10月16日にマドリードを出て帰国の途に着く以前にピサーロは休暇を利用してスペインに戻って両者が知己を得たことは充分考えられるばかりか²⁶、ロルカを含めたいわゆる「片隅」グループのメンバーたちが、中山に日本に向かったピサーロのことを話さないはずがなかった。しかもピサーロは日本に向かうだいぶ以前から極東世界にかなりの興味をいだいており²⁷、それを承知していた仲間が、中山にただならぬ興味を示したことは想像に難くない。

ここでモラ・グアルニードの中山描写にある「習字をもって自作の俳句を書き、対訳を示した。時には竹笛で日本のメロディーを吹いて聞かせた」に着目してみる。本稿筆者は1992年、ロルカやダリが滞在したことでも有名なマドリードの「学生館」で講演をしたことがきっかけで、正確な日付は失念したが同年春、当時存命だったロルカの妹イサベル (Isabel García Lorca) に、まさに学生館でお目にかかっている。甥のマヌエル・フェルナンデス・モンテシーノス (Manuel Fernández-Montesinos) も同席した。後者とはそれ以前から知己を得ていた。妹は兄フェデリコから中山の話をよく聞かされていたこと以外に、フェデリコの遺品から出てきたものだと言って毛筆で書かれた歌を見せ、さらにそのコピーをくださった。「年ごとに/かたむく家の/庭ずみに//ひとり色ます/ダリアの赤さ 牧笛」²⁸

25 大阪外国語大学西語部会、『Más y menos』、第17号 (佐藤・ピサロ先生追悼号)、1957年、p.47

26 たとえば1925年6月、ピサーロは一時帰国してグラナダに滞在しており、これは中山がマドリードを離れる同年の10月以前だ。Gibson, op.cit., I, p.141. 同じくギブソンによると同年11月上旬、ロルカはピサーロを含めた数人と共に Jaén, Úbeda を旅しているが、10月16日にマドリードを出発した中山とそれ以前に会ったかどうかは微妙で、確証が得られない。Gibson, op.cit., I, p.426 参照。

27 ピサーロはたとえば1918年の段階で新聞 *Renovación* に “Li-Tai-Pé” (李太白=李白) などのエッセイを寄せている。Gibson, op.cit., I, p.141. Gibson は *Renovación* をここで「雑誌」としているが (p.137でも同様)、これを主宰していたのは Antonio Gallego Morell の父親で、息子はこれが発行部数の少ない「地方新聞」だったことを含めて詳細に解説しているので、こちらが正しいと思われる。Gallego Morell, Antonio, *Sobre García Lorca*, Granada, 1993, p.183.

28 先に引用した朝日新聞の拙稿では「ひとり色ます」が「ひとつ色ます」と誤植された。

とある。和紙に書かれているのは俳句ではなく短歌だが、スペイン人向けに書かれたものである以上、俳句か和歌かはさして重要ではなく、日本の短詩として和歌・短歌より圧倒的に知名度の高い俳句・俳諧の方が記憶に残った可能性が高い。ただその和紙にはモラ・グアルニードの言う対訳は付されていない。和紙に毛筆だったため、敢えてそこにスペイン語訳を書かなかった可能性もある。

この「遺品」に関しては、すでに研究記事がある。スペインの俳句研究第一人者のロドリゲス・イスキエルド (Rodríguez-Izquierdo) のものだ。ロドリゲス・イスキエルドは該当歌人の「牧笛」が中山なのか、他の歌人なのか不明としながらも、むしろ否定的な立場を取っている²⁹。本稿筆者としては、むしろ肯定的な立場を取りたい。第一の理由は、この短歌が文学作品として、少なくとも本稿筆者には特別秀作とは思われず、本職歌人のものとは考えにくいこと。第二に筆運びもプロを思わせるような達筆では決してなく、器用ではあったものの習字の訓練を積んでいなかったという中山政子夫人の発言と一致すること。第三は俳人の名前「牧笛」である。ここでモラ・グアルニードの指摘「竹笛で日本のメロディーを吹いて聞かせた」を想起する必要がある。中山に尺八の心得はなかったが、モラ・グアルニードの指摘では“una flautita de bambú”と縮小形が使われていて、これが尺八である必要はなく、グラナダなどにも蘇生していた竹を細工した手製の笛だった可能性が充分ある。そこで故郷の牧歌的な思い出と自分が吹く笛を連携させて「牧笛」を編み出した……この推論が成立するなら、この短歌は中山幸一が素人歌人および素人書家として、にわか仕込みで書き残したものとなりうる。

次に検討しておかなくてはならないのは、中山と演劇の関わりだ。すでに指摘したように、中山は大学在学中にスペイン語劇をやり、同窓生の川崎栄治氏によると『王なればこそ』という作品で Carmen という名の女役を見事に演じたという。ただし、川崎氏はその原作者名、原題ともに覚えておられなかった。また本稿筆者のいるところで、川崎氏はどなたかに電話をかけて聞いてくださったが、やはり駄目だった。

今さら解説するまでもないことだが、ロルカは 1931 年に移動演劇集団

29 Rodríguez-Izquierdo, Fernando, “Japón y Granada. Presentación de un tanka histórico”, *Boletín de la Fundación Federico García Lorca*, 12, 1992, p. 12.

La Barraca を結成して、スペイン各地で古典演劇を巡回公演している。そしてなによりも、彼自身が傑出した演劇作家だった。もし中山が自分の「武勇伝」をロルカに語ったとすれば、ロルカは狂喜して中山の話に夢中になったはずだ。問題は中山が女役を演じたという『王なればこそ』の原作者と原題だ。実はこれに関しては先に引用した朝日新聞の拙稿、さらにもう一つの啓蒙的記事³⁰の中で原作者を17世紀のフランシスコ・デ・ロハス・ソリーリャ (Francisco de Rojas Zorrilla)、原題を *Del Rey abajo, ninguno o El labrador más honrado, García del Castañar* と特定した書き方をした。確かに原題を直訳すれば「王の下に誰もなし」で、『王なればこそ』の演題は十分に可能であるばかりか、中山たちが演じる前の20世紀に限っただけでも1910, 1916, 1917年に版が刊行されている。とりわけ1917年の版は有名な *Clásicos Castellanos* のコレクションに収録されたF.ルイス・モルクエンデ (F. Ruiz Morcuende) による注釈校訂版で、時代環境を考えても、比較的入手が容易だったことが考えられる。

ところが問題はこれで解決したことにならない。登場する女性の中にCarmenがないからだ。この作品に登場するのは王妃の従姉妹、貴族 don Sancho de la Cerda の娘で爵位を持つ Blanca という美女である。太陽のように輝き、彼女を前には雪が黒く見えるほど³¹とまで形容される。Blanca の名前を、スペイン女性の名前として遙かに耳慣れた Carmen に差し替えて上演した可能性がある。

別の可能性 (以前の拙稿で言及しなかった可能性) として、ロペ・デ・ベガ (Lope de Vega) の代表作の一つ *El mejor alcalde, el Rey* が考えられる。原題を直訳気味に訳せば「最良の村長 [裁判官] は王」で、やはり『王なればこそ』に該当しうる。なお、この作品は中山が他界した1948年に永田寛定により『上なき判官これ天子』(日本評論社)の題をもって出版されている。ロペの作品のほうがロハス・ソリーリャの作品よりも明らかにポピュラーだが、中山が演じた頃には、意外なほど入手しうる版が少なかった。目立つところではメネンデス・ペラーヨ (Menéndez Pelayo) が1890-1913年にかけて15巻で出したロペ・デ・ベガ作品集ぐらいしかない。

30 拙稿「中山幸一：ロルカに俳句を教えた日本人」、「書簡・スペイン・所感」、第2信、NHKラジオスペイン語講座テキスト連載、1996年5月号、pp.68-71、とりわけp.69。

31 ed. de Jean Testas, Madrid, 1971, p.80. v.263以降、とりわけvv.271-272。

1910年頃にバルセロナの Biblioteca Teatro Poular から出たもの、1917年にマドリードの Félix Moliner から出た *Obras teatrales de los clásicos* に収められた版が考えられなくもない。1920年に Clásicos Castellanos 版が出ているとはいえ³²、当時の流通事情からすれば、中山たちがこの版を入手して上演した後に1921年春に卒業していったとは考えにくい。我々が当惑させられるのは、仮にこの作品の方だったとしても、同じく登場する女性に Carmen がいないことだ。仮にこの作品だったとしたら、Elvira の名を、同じく耳慣れたスペイン女性の名前 Carmen に差し替えたことになる。女性主人公が Elvira で、残されている中山の写真の女装の衣装からすると、ロハス・ソリーリャのものより Lope のものかとも思われるのだが、いずれの作品か、はたまた別の意外な作品なのかに関しては、最終的な決め手を欠いたままだ。

ただ確かなことは、仮にこの二作品のいずれかであったとしても、ロルカが牽引した移動演劇集団『ラ・バラカ』(*La Barraca*)の主要レパートリー³³には、いずれの作品も入っていなかったことだ。

4. 中山幸一とファリャ

作曲家ファリャと中山の関係も検証する必要がある。残念ながら、両者の関係については当初引き合いに出したモラ・グアルニードの記述と、それを裏付ける1923年4月2日の電文中にファリャと中山の名前が記載されている程度だ。

ファリャと暗殺される直前のロルカ、つまり最終段階での錯綜した関係についてはギブソンの各種著作の中で微細にわたって述べられているので、ここでは一切扱わない。さしあたって関心があるのは、中山とロルカが付きあった頃のファリャとロルカだ。ファリャは若くして作曲家とし

32 データの検証には同志社大学の稲本健二教授のご協力を仰いだ。記して謝意を表する。

33 Sáenz de la Calzada, Luis, “*La Barraca*”, Madrid, 1976, p.106 に主要レパートリーが列挙されている。Cervantes: *La cueva de Salamanca*, *La guarda cuidadosa*, *El retablo de las maravillas*, *Los habladores*; Calderón: *La vida es sueño* (auto sacramental); Lope de Vega: *Fuenteovejuna*, *Las almenas de Toro*, *El caballero de Olmedo*; Juan del Encina: *Égloga de Plácida y Vitoriano*; Lope de Rueda: *Paso de la tierra de Jauja* など。ただし厳密な意味で古典演劇に限定したものではなく、ロマンセの *Conde Alarcos*, 先輩詩人 Antonio Machado: *La tierra de Alvarogonzález* などの舞台化も含む。

て成功し、各地からひっぱりだこだった。1915年の『恋は魔術師』(*El amor brujo*)、1916年の『スペインの庭の夜』(*Noches en los jardines de España*)、1917年の『三角帽子』(*El sombrero de tres picos*)と矢継ぎ早に話題作を発表し、1876年生まれのファリャは1898年生まれのロルカたちからすれば、芸術分野こそ違え、仰ぎ見るようなあこがれの存在だったに違いない。そしてよく知られるように、ロルカは作曲を含め、音楽そのものに多大な関心を寄せていた³⁴。

ファリャは自分が落ち着いて仕事に没頭できる場所を求めており、1919年8月12日に家探しでグラナダに短期間やって来る³⁵。ロルカはこの時、あこがれの先輩に初めて紹介されている。その後、実際にファリャがグラナダに居を構えたのは翌1920年で、ロルカとファリャとの間に友情が生まれるのは、2度目のこの時だったという³⁶。グラナダにやってきたファリャが「片隅」グループのたむろするCafé Alamedaに時々顔を出すようになったことで³⁷、「片隅」グループは一層活力を得る。さらにファリャを慕ってファリャ宅にも気鋭の若者たちが参集し始める。その中の一人に中山幸一がいたことになる。

1922年6月13,14日の両日、ファリャやロルカの尽力をもって「カンテ・ホンダ」のコンクールがアルハンブラを会場に開かれ、そこにはアルバ侯爵、Ramón Pérez de Ayala, J.B. Trend, Ramón Gómez de la Serna, Ignacio Zuloaga, Santiago Rusiñolをはじめとする、まさに各界の名士³⁸が集結した。前掲の電報の日付は1923年4月2日で、6月25日にはファリャの『ペドロ親方の人形芝居』(*Retablo de maese Pedro*)が初演³⁹され、これまた大成功をおさめている。つまり中山はファリャのいわば晴れ舞台のさなかにファリャと交流を結び、今をときめく大音楽家に日本の音楽談義を聞かせたことになる。

ここで今一つ指摘しなくてはならないことがある。グラナダのアルハンブラ宮殿近くにあるファリャの家(現在は昔の様子を忠実に保った博物館)

34 初期ロルカの音楽への傾倒については Francisco García Lorca, op.cit., p.159, 167.

35 Orozco, Manuel, *Falla. Biografía ilustrada*, Barcelona, 1968, p.102.

36 Couffon, op.cit., p.28, nota 1, p.38, nota d).

37 Francisco García Lorca, op.cit., p.148.

38 Gallego Morell, *Antonio Gallego Burín*, op. cit., p.39.

39 M. Orozco, op. cit., p.144.



ファリャ家所蔵の浮世絵複製（筆者撮影）

の壁に飾られた2点の浮世絵の額入り複製画である。1点には「前北斎為一筆」とある。もう一点は歌麿の「繪兄弟」ものだ。写真で見ると、後者には二つ折りにした跡がはっきり残っていて傷みが目立つ。

この複製画をファリャは誰から手に入れたのか。同博物館の所蔵の家具調度品まで克明に記録管理しているファリャの姪マリベル（Maribel）に、確か1982年、I・ギブソンに尋ねてもらったが、この複製画の由来はどうしても確認できないとのことだった⁴⁰。またロルカの妹イサベル（現在は故人）に本稿筆者がこの複製画について尋ねると、それは中山幸一からの贈り物に違いないと断言した。たしかに折り目跡がくっきりついているようでは、手慣れた人物が運んで寄贈したとは考えにくく、中山からの寄贈である可能性が高いとはいえよう。

ただしもう一つの可能性として、例のミゲル・ピサーロが日本からの手土産に持ち帰った可能性も否定できない。このピサーロとファリャとの交流がどの程度のものであったかは、少なくとも現段階で確証が得られておらず、これ以上の推論は不可能である。

た

5. 結語

以上、「正体不明」の Koichi Nakayama を特定し、中山幸一とスペイン、とりわけ「片隅」グループのロルカや作曲家ファリャと交流したことを、残されたわずかな直接資料、間接周辺資料を用いて、ある程度明らかにした。本稿を叩き台にして、今後さらなる追跡がなされなくてはならない。

40 畏友 Gibson には、この他、J.B. Trend に関する貴重な資料などをフォトコピーで提供していただいた。この場を借りて謝意を表したい。

中山とロルカ、ファリャとの親交は、ロルカの妹が「兄からその日本人の話はよく聞かされた」と発言しようが、たとえばミゲル・ピサーロとロルカとの親密度とは比較にならず、両者の親交と比べたら一つのエピソードの域を出ないに違いない。本稿ではテーマが異なるので深入りしなかったが、よく知られるように、ロルカはピサーロに言及する作品、献辞、書簡を多く残している。Pizarro のことを書簡で Pizarrín⁴¹ や Pizarrillo⁴² などと縮小形を用いて愛着を込めていることが象徴的と言ってよい。中山に関しては、そのようなことはなかった。

作曲家ファリャとの親交を得て、彼の家まで出かけて音楽談義をしたのが事実であれ、ファリャは 1923 年から 26 年にかけて招待旅行などで、イタリア他にかかなり長期の旅行をしており⁴³、1925 年に帰国する中山との親交が頻繁に繰り返されたとは考えにくい。

それでもなお、スペイン芸術史に燦然たる名前を残し、益々評価が高まり研究が進みつつある両者と直接交わる好機に恵まれた中山幸一の実在は、とかく政治的視点から話題にされがちなロルカの人間像に、微かであれ一条の光を照射するものであり、オペラ、管弦楽、民族音楽の各分野で成功をおさめたファリャが多忙な時間を割き、遠来青年の日本の伝統音楽談義に耳を傾けたことは、ファリャの音楽家としての、そしてなによりも人間としての幅を雄弁に物語る一つの興味深いエピソードとみなすことができよう。

41 *Epistolario completo*, Andrew A. Anderson y Christopher Maurer (eds.), Madrid, 1997, p.143.

42 *ibid.*, p.310.

43 M. Orozco, *op.cit.*, p.148.